



B 29 の焼夷弾攻撃で焼けた姫路の中心地（西二階町付近）

(二) 空襲と復興

くうしゆう ふっこう

姫路大空襲

太平洋戦争が終

わりに近づいた一九四五年（昭和

二〇年）六月二十二日、アメリカ

空軍の爆撃機が、姫路に攻撃を加

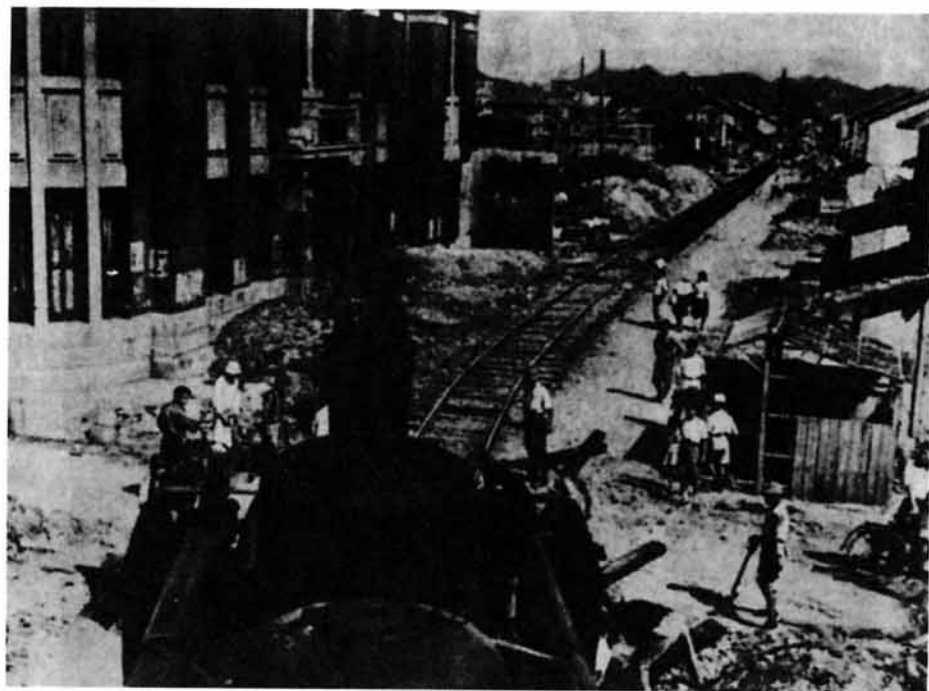
はくげきき こうげき

えてきました。市の東部にあった川西航空機姫路製作所をはじめ、周辺の工場などが爆撃され、大きな被害を受けました。

十日後の七月三日夜、アメリカ空軍の爆撃機B 29の編隊が、姫路市に焼夷弾攻撃を加えてきました。姫路駅前をはじめ、市内の中心部に焼夷弾が雨のように降り、姫路の大半が焼け、おおぜいの市民が死傷しました。

この前後二回にわたるアメリカ軍の爆撃で、姫路市民約十一万人のうち五万六千余人が被害を受け、約五百人が死亡しました。

戦後復興 一九四五年（昭和二〇年）八月十五日、日本はポツダム宣言を受託して、アメリカ・イギリス・オーストラリアなどの連合国に無条件降伏をしました。一九三七年に日中戦争が開始されてから、八年間にわたって戦争を続け、国の総力を出しつくしたので、終戦直後の日本は国力がおとろえ、国民の多くは、苦しい生活をしました。

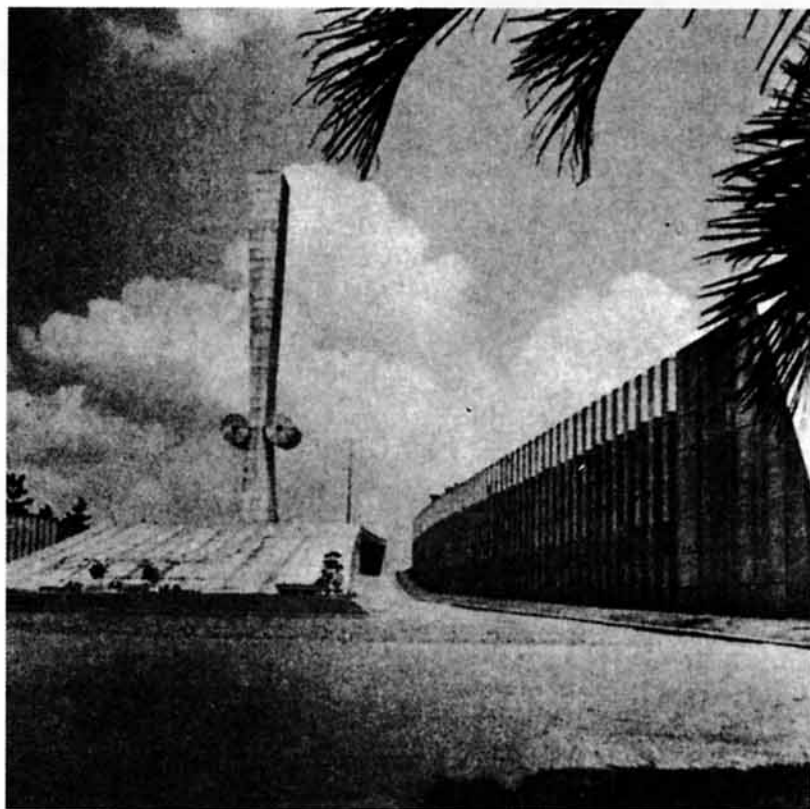


姫路市中心街での焼け跡整理

(二階町へ機関車を乗り入れて焼け跡の整理をする市民)

姫路市民は、食糧^{しよくりよう}不足、復興資材の不足と戦いながら、力を合わせて戦災復興に立ち上がりました。最初に商店街が再建され、続いて工場が建て直されました。一九四八年（昭和二十三年）から市の戦災復興事業も開始されました。姫路駅前に建設された五十メートル幅^{はば}の広い道路は、市の戦災復興事業のシンボルです。

姫路は全国の戦災都市のなか



手柄山の慰霊塔（平和への祈りの塔）

で、いちばん早く復興
しました。

これは、私たちの祖
父母や父や母たちが、
力を合わせ、汗を流し
て働き、新しい姫路の
町づくりに励んだから
です。

平和への願い 手

柄山の頂上に高さ二十
六メートルの白い塔が
そびえています。

一九五六年（昭和三十一年）全国戦災都市連盟れんめいが建てた慰霊塔れいで、台石に「太平洋戦争全国戦災都市空爆死没者しぼつの霊れい此このところに眠ねむる」と刻きざまれ、塔の両側に爆撃を受けた全国の都市の碑ひがならんでいます。

この碑によりますと、戦災都市の数は、一都九十九市十三町におよび、死没者は五十九万千八百人（非戦闘員）、被害を受けた人は九百十九万千百人となっています。（財団法人太平洋全国空爆犠牲者慰霊協会著『平和の祈り』より）

これらの数は、戦争がどんなにむごいものであったかを物語っております。この塔は、全国戦災都市連盟の会長をしていた当時の石見元秀いわみもとひで姫路市長の呼びかけに応じて、全国から集まったお金で建てられたものです。空襲で家族を失った人たちの悲しみのうえに「二度と戦争を起ささないように」という、日本人の平和への願いがこめられているのです。

また、一九九六年（平成八年）四月には、当時の貴重な資料を展示した「姫

路市平和資料館」が完成しました。